

コロ島を経由し、博多港に引揚げた。

引揚げ後は、しばらく郷里にいて、心身の保養と再起をはかるための情報の収集とその準備にこつこつとした。元より手持金は引揚げ家族一人あたり千円也の引揚げ手当が唯一の財産。住宅、食料、生活器材の確保と冬に向かつての衣料、寝具、燃料の用達など引揚げ者には生命にかかわる重大な対策に難渋した。まず「その日をどうして食べるのか！」こうした苦行が引揚げ後の生活のすべてであった。引揚げ後四か月過ぎ、ようやく体力を回復したので、就職したが、引揚げ者に冷たい職場のふんい気にずいぶんわずらわされた。インフレ急進のなかで給料を貰っても、わずかな食料の配給料金にすら不足する状態であった。いったいどうして引揚げ当時の家計の切盛りを行ったのかこの苦情の時代の生活を支えた妻の強靱な意思と生活の知恵に感謝をするのみである。

三人の子と涙の逃避行

兵庫県 小南 艶子

昭和十五年、大陸の花嫁として国策にそって渡満しました。主人は龍爪開拓協同組合に勤務。何不自由なく、広々とした広野で、楽しい生活を過ごし、三人の子どもにも恵まれ、六年間は夢のようでした。いうことのない生活だと思っていたのに、昭和二十年六月、主人に召集がきました。八月、ソ連の戦車が林口まで侵入してきているからと、子ども二人がいるため、何も持つことができず、八月十五日に家を出て、皆さんといっしょに歩けばけと食事もろくになく、集団から遅れながらついて行きました。

すると、そこまでソ連軍がはいってきているとのこと、山に逃げ、野宿をしながら歩き、行けど行けど集団の列から遅れ、やっと追いついたら出発準備、たとえ一人でもと思って腰をおろして子どもを休ませ、両ひざに

もたれてグウグウと寝ている姿はいじらしく可哀そう。

「出発よ」と三人の子どもをばげまし、集団の列について行くのが精いっぱいでした。不安でこわい山中でした。

何どか川を渡り、鉄橋は破壊され、首まであるような川を三人の子どもを一人一人岸まで送るといふ苦しい川渡りをしました。牡丹江まで、汽車なら三時間で行けるところを歩いて一か月もかかりました。なんとか命からがら牡丹江へつくことができ、そこから無蓋車に乗り、新京へ。その間、満人が車内に侵入し、物をとり、人を引きつりおろしたり、生きた気持ちがありませんでした。新京へ行き、私たち主人のいない者は満人の家へ、野菜の選別に働きに行きました。お金は一銭もなく、みんなソ連の兵隊にとられ、ハンゴウ、スプーンから時計、万年筆、帯どめ、あらゆる物はみな取られました。お金さえあれば子どもにまんとうの一つも買ってやれるのにと思いました。

せっかく新京まで連れてきたのに下の子どもが腹熱を起こし、十一月一日とうとう死にました。私が土を掘って埋めて、毎日お乳をしぼってお供えしてやりました。

二十一年六月頃、内地へ帰れるとうわさで墓を掘り起し、木を積んで遺体を乗せ、また、木を乗せ、焼いたところきれいにお骨になり、箱に入れ、肌身はなさず持つて帰り、お墓にうめて石碑を立てました。七月末、コロ島に終結、内地へ帰り、父母兄弟みんなに再会したうれしさは忘れることができません。

主人がシベリアから帰るまで、里で親子三人がお世話になり、主人は二十三年ぶじに帰ってきました。

それからが一苦勞、満州で戦後は米一粒も食べられなかったので、石にかじりついても百姓をしようとと思い、「今に見ておれ、大陸まで行ってきた者はがんばるぞ」と百姓をし、主人は関西電力に務め、十三年半苦勞しました。主人は五十八年九月二十九日死去しましたが、「お母ちゃんが苦勞して連れて帰ってくれたお陰で孤児にならずに感謝してる」と言っって子どもたちはとてもやさしく親孝行してくれまます。